筑波大学審査学位論文（博士）

論文題目

理想主義・現実主義および行為主義・人格主義の相補軸に基づく道徳教育の方法原理

―ディルタイの相対化の射程を克服する相補化の方法論―

人間総合科学研究科　学校教育学専攻

吉田　誠

１．問題の所在

これまで道徳教育の研究において，道徳教育の方法に関するメタ理論的な研究はほとんど行われてこなかった。それは，自分が「よい」と思う方法を発見するとそれを正当化する根拠ばかり探し，課題を無視してしまいがちな心理によるものであろう。このような心理が働けば，道徳教育方法の提唱者や実践者は，自分の方法を正当化するために他の方法に対して批判的，排他的になりやすい。そして，一つの指導方法に固執するあまり，その方法が適さない指導内容に無理に適用しようとして，無意識に理想の子ども像に沿った行為や生き方を教え込むといったことにもなりがちである。一方で，それでは子どもたちの主体性が失われると感じ，主体的に道徳を学べるよう話し合い活動を取り入れて自由に発言させたとしても，それだけでは子どもたちが何を学んだのかわからず授業の成果を評価することもできなくなってしまいがちである。このように，教師が道徳的価値を教えることと子どもたちが道徳を学ぶこととが分裂する背景には，倫理学や政治哲学における正しさの決め方の対立および道徳教育方法の対立がある。

２．本研究の目的と方法

本研究では，正しさの決め方や道徳教育方法を相互に関係づけることで，道徳教育に取り組む教師が複数の実践方法を目的や状況に応じて柔軟に適用できる方策を提示することを目的とする。そのために精神科学的教育学を確立しようとしたディルタイによる倫理学の類型論と精神科学の自己省察の方法論に基づきながらも，それらについてディルタイが論じ残した課題を彼の課題意識に沿った形で克服し，さらに現代の社会状況および倫理学や心理学，神経科学の議論を踏まえて展開する形で解決策の提案を行う。

３．論文の構成と概要

次に本論文の構成と概要を示す。

序章では，道徳教育の方法原理に関する先行研究として，まず平野武夫の価値葛藤論に基づく方法原理を取りあげ，その失敗の原因が，平野が依拠したシュプランガーによるディルタイ解釈の偏りにあったことを示した。そして，道徳教育の方法原理を構築するためにディルタイ教育論を捉え直した上で，ディルタイが成し遂げられなかった課題を当時と現代の時代状況の違いを踏まえながら乗り越えていく必要性について論じた。

第１章では，まずディルタイの生前から現代に至るまで重層化したディルタイ思想の捉

え方とそれらを彼の生涯を貫く実践的問題関心に従って統合した捉え方に基づくディルタイ教育論再興の必要性について論じた。そして，ディルタイが相対主義，虚無主義の思想的影響力が高まる状況下で，道徳的価値の普遍妥当性要求と歴史的相対性を統合し，共同体を再興する実践的問題関心を生涯抱いていたことを明らかにした。その上で，ディルタイが従来の倫理学を自然主義，否定的制限的倫理学，形成的倫理学の三つに類型化し，その問題解決の方法をそれぞれ形而上学的方法，内的経験の方法，道徳の大衆現象研究の方法とした上でそれらの課題を克服しようとして社会倫理学を提唱したことを示した。そして，理論と実践の乖離の問題を克服するためにディルタイが中期に展開した自己省察の方法が，後期に現れた虚無主義の問題を克服しようとする中で体験・表現・理解の循環の方法として発展したことを明らかにした。そして，精神科学論で論じられた「形象化」概念と教育論で論じられた「陶冶」概念の関係を手がかりに体験・表現・理解の循環の方法が生活経験の段階から客観的精神の段階を経て時代精神の段階に至る三重の循環に基づく教育方法であり，ディルタイはこの教育方法によって共同体再興を目指したと考えられることを示した。

第２章では，まず，ディルタイの倫理学の類型論の課題として，形成的倫理学の類型が未分化であるにもかかわらず類型を固定的に捉えたこと，そのため類型間の対立関係が明確ではなかったことを指摘した。その上で，ディルタイの類型論の時代的背景による相対化の射程の限界を克服するためにディルタイの類型論と現代の哲学や倫理学の類型論との類縁性と相違点を検討することで理想主義と現実主義，行為主義と人格主義の二組の対比関係を明確にした。さらに，ディルタイが倫理学の類型化論では達成し得なかった相対主義，虚無主義による共同体崩壊の危機を克服する相補化の視点から倫理学の類型や正しさの決め方のアプローチを理想主義と現実主義，行為主義と人格主義の相補軸平面上に展開する方法を提案した。次に，ディルタイ当時のドイツにおける道徳教育の課題が産業化社会における世代間の連続性維持と主体的な個性伸長の両立にあったことを示した。そして，現代の我が国の知識基盤社会においては，産業化社会の課題を克服した上で，さらに道徳的問題の主体的解決のアプローチを拡張する必要があることを示した。その上で，正しさの決め方のアプローチについて理想主義と現実主義，行為主義と人格主義の相補軸平面上で総合する方法とディルタイの教育論とを統合した。これにより，ディルタイの方法における時代精神の段階からさらに一歩進めて，単に生活経験や客観的精神を捉える枠組みを歴史的に相対化するだけでなく，他の枠組みとの違いを相補的に捉えて目的や状況に応じ

て使い分けながら未知の問題解決に取り組むアプローチ拡張が可能となることを示した。

第３章では，理想主義と現実主義，行為主義と人格主義の相補軸に基づく方法原理を構築するため，まず，特定の正しさの決め方のアプローチから他の枠組みとの違いを相補的に捉えて正しさの決め方のアプローチを拡張する事例を示し，そこで生じる信念対立およびその克服方法についての検討を行った。そして，理想主義と現実主義，行為主義と人格主義の相補軸平面上に道徳科の教育方法をねらいに基づいて類型化する「道徳授業ねらいの８類型」についてその概要とそれぞれのメリット・デメリットについて論じた。それによって教師がどの授業方法を志向しているかを自覚できれば自らの授業方法の課題を自覚，改善でき，必要に応じて他の授業方法も柔軟に取り入れながらより柔軟かつ幅広い授業スタイルに発展させ続けることが可能になることを示した。

第４章では，相補軸に基づく総合化の理論的展開として，現代の脳神経科学や社会心理学から疑義が呈されている「責任」概念を取りあげて類型化し，理想主義と現実主義，行為主義と人格主義の相補軸平面上に位置づける試みを行った。そして，「責任」概念の歴史的発展過程を辿りながら，世代間責任，結果責任，問題解決責任，共感的責任の四つの「責任」概念が理想主義と現実主義，行為主義と人格主義の観点および当事者研究および言語学における中動態の議論に共通に見られる連続性と程度の差異に基づくスペクトラム的な能動・受動の捉え方から相補的に捉えられることを明らかにした。そして，その過程で明らかになった現代の時代精神としての相補化の視点に基づいて，理想主義と現実主義，行為主義と人格主義の二軸平面が相補軸平面であることの意味について検討し，近代から現代の歴史的発展過程で現実主義と人格主義が重視されるようになりつつあることを明らかにした。

第５章では，「欲望論的アプローチ」による人格主義的方法に基づく人格の成長追求型の道徳授業について論じた。まず人格の向上追求型授業の源流となる米国の人格教育，特にその代表者の一人とされるトーマス・リコーナに着目して，人格教育の内容の発展過程を明らかにするとともに，我が国の道徳教育との相違点を明確にした。それにより，我が国において人格教育を導入することの意義と課題を示した。そして，人格の成長追求型の道徳授業の一例として日本型人格教育の道徳的習慣形成の方法が米国の人格教育にどのように基づいているかを論じた上で，その具体的な授業実践例を示し，その結果についての分析と評価を行った上で，価値の理想追求型授業に人格の成長追求型の発問を導入する形のアプローチ拡張の例を示した。また，その際に発問を理想主義と現実主義，行為主義と人

格主義の相補軸上に配置して発問の流れを図示した発問分析図によってアプローチ拡張を意図的計画的に行うことができることにも触れた。

第６章では,「欲望論的アプローチ」と「状況・事実論的アプローチ」の両方による現実的人格主義的方法に基づく集団の成長追求型の道徳授業について論じた。まず集団の成長追求型授業の重要な理論的背景となった当事者研究の視点から道徳授業で子どもたちが「自分を語る」ことのリスクを低減し，道徳的生活の微分化の克服につながる当事者研究的道徳授業の方法について検討した。そして,当事者研究的道徳授業の視座と方法を示し,同一教材に基づく当事者研究的道徳授業と問題解決型の道徳授業の指導過程を比較することで当事者研究的道徳授業の特徴を明らかにした上で，その具体的な授業実践例を示し，その結果についての検討を行った後，生き方の理想追求型授業に集団の成長追求型の発問を導入する形のアプローチ拡張の例を示した。

第７章では,「状態・事実論的アプローチ」による現実主義的方法に基づく状況適応追求型の道徳授業について論じた。まず，状況適応追求型授業の基礎となる人間と環境や状況との関係から道徳を捉えるモラル・アフォーダンスの概念について検討を行った上で，モラル・アフォーダンス獲得の道徳授業の構想について論じた。そして，その具体的な授業実践例を示し，その結果についての分析と評価を行った上で，行為の理想追求型授業から状況適応追求型授業へのアプローチ拡張の例を示した。さらに，モラル・アフォーダンス獲得の道徳授業が道徳的価値を実現するために求められる資質・能力の学習について不明確である課題を克服するとともに道徳性成長の評価を行う方法として，柔軟なコンピテンシー・モデルによる道徳授業単元化の方法を提案した。まず,道徳科の内容項目について,それを実現するために必要とされる視点や思考，行動の様式を成熟した大人を基準に検討した上で子どもたちの発達段階を考慮に入れて段階的に提示したコンピテンシー・モデルを作成した。そして，それに基づいて授業計画を作成し，実践しながら子どもたちの道徳性の成長に関するエピソード評価を通じて成長の方向性と課題を見極めつつコンピテンシー・モデルと授業計画を柔軟に修正するカリキュラム・マネジメントの方法を提案した。最後に実際に実践した三つの授業について発問分析図を用いて分析を行うことで，授業を行った教師と子どもたちのアプローチを次第に拡張させていく実践を継続することによって将来的に自己変容型知性に向かう可能性と，相補軸に基づく類型化を発問分析に応用することで道徳科の指導方法の改善やカリキュラム改善に資する可能性を示した。

４．本研究の成果

本研究の成果９点を以下に列挙する。

①ディルタイおよび現代の倫理学の類型論から理想主義と現実主義および行為主義と人格主義の二軸に基づいて倫理学の４つの類型の関係が示せることを明らかにしたこと。

②倫理学の４つの類型にはそれぞれメリット・デメリットがあることからそれらを理想主義と現実主義および行為主義と人格主義の二軸平面上に配置することでそれらを相補的に捉えることができることを明らかにしたこと。

③ディルタイ教育論における生活経験の段階から客観的精神の段階を経て時代精神の段階に至る体験・表現・理解の循環の教育方法を現代社会の課題に基づいて拡張した上で理想主義と現実主義および行為主義と人格主義の相補軸平面上に位置づけることで倫理学や正しさの決め方のアプローチの捉え方について段階的に成長させた上でさらに他のアプローチへの拡張を目指すことで複数のアプローチをメリット・デメリットに基づいて使い分けたり複合的に用いたりする相補化の視点を獲得できることを明らかにしたこと。

④道徳教育の方法をそのねらいに基づいて理想主義と現実主義および行為主義と人格主義の相補軸平面上に位置づけた道徳授業ねらいの８類型を提案することで，それぞれの方法の理論的背景と道徳授業のねらいや発問との整合性を確認することができ，複数の方法をメリット・デメリットに基づいて使い分けたり複合的に用いたりすることで教師も子どもたちもさまざまな正しさの決め方のアプローチに基づいた道徳授業の学習活動を通して自分に合ったアプローチを確立し，それを深めつつ他のアプローチへとアプローチを拡張する可能性を示したこと。

⑤道徳授業の発問を理想主義と現実主義および行為主義と人格主義の相補軸平面上に位置づけて発問分析を行う方法を提案したことで，ある教師が望ましいと考える道徳授業の指導案の発問を分析する一般的発問分析により，その教師の道徳授業のアプローチの傾向を自覚してアプローチ拡張の方向性を検討できる可能性を示したこと。

⑥従来の道徳授業の発問を理想主義と現実主義および行為主義と人格主義の相補軸平面上に位置づけて発問分析し，改善を行う授業前発問分析により発問が教師の意図するねらいに即しているかどうかを検討することができる可能性を示したこと。

⑦実際に授業を行って実際に教師が行った発問とそれに対する子どもたちの反応を踏まえた上で発問を理想主義と現実主義および行為主義と人格主義の相補軸平面上に位置づける授業後発問分析によって子どもたちの学習の実態を把握し，カリキュラム改善につなげる

ことができる可能性を示したこと。

⑧同じ教師が実施した複数の授業の発問を理想主義と現実主義および行為主義と人格主義の相補軸平面上に位置づける授業後発問分析を時系列で比較することによって教師自身のアプローチ拡張の状況を把握し，指導方法の改善に資する可能性を示したこと。

⑨従来，我が国の道徳教育ではほとんど行われてこなかった３つの授業類型について，それぞれの方法の理論的背景と実践方法，実践結果の分析と評価を行うことで，道徳授業のアプローチの幅を広げることができたこと。

本研究では道徳教育における複数の方法のメリット・デメリットを踏まえた上で相補的に用いることを可能にする道徳教育の方法原理を示した。本研究の今後の課題は，この方法原理についての理論的精緻化に関する課題と実践的展開に関する課題に大別される。

まず，理論的精緻化に関する課題としては，理想主義と現実主義，行為主義と人格主義の相補軸に基づく方法原理を用いて倫理学の諸理論を相補軸平面上に位置づけ，相互の関係を確認することで正しさの決め方のアプローチの相補的関係をより明確なものにしていく必要がある。そして，本研究では「責任」概念について類型化して相補的に捉えなおしたが，それ以外にも道徳科の学習指導要領で内容項目として示されている道徳的諸価値についての多様な捉えを相補軸平面上に位置づけて相互の関係を解明するとともにそれらの捉えを支える倫理学的な視点との関係性を明確にする必要がある。その際，これらの理論的精緻化の過程で理想主義と現実主義，行為主義と人格主義の相補軸平面に新たな相補軸が発見され，追加される可能性も念頭に置いておく必要がある。

次に，実践的展開に関する課題としては，本論文では道徳授業のねらいの８つの類型のうち，従来の道徳教育において行われてこなかった三つの方法について筆者の提案に基づく実践例と成果の検証を第５章から第７章に示すに留まっていることから，既存の方法からの多様なアプローチ拡張の実践例と成果の検証をさらに積み重ねて実践的な妥当性を継続的に検証していく必要がある。それと並行して理想主義と現実主義，行為主義と人格主義の相補軸平面上に発問を配置する発問分析に基づく授業改善の方法についても，実践を積み重ねながら継続的に改善していく必要がある。さらに，各類型のアプローチの成長とアプローチ拡張を評価する方法についても開発し，検証する必要がある。本研究ではその萌芽として状況適応追求型授業におけるコンピテンシー・モデルによる評価方法を提案したが，コンピテンシー・モデルによる評価方法が他の授業類型に応用できる可能性を検討したり，他の授業類型に適した評価方法を開発し，検証したりする必要がある。

資料１　章構成

序　章　研究の目的と方法

第１節　先行研究の検討

第２節　研究の目的と方法，および各章の構成

第１部　ディルタイ教育論の現代的展開と相補軸に基づく道徳教育の方法原理の理論的展開

第１章　道徳教育の視点に基づくディルタイ教育論の再検討

第１節　ディルタイの危機意識と実践的問題関心

第２節　倫理学の類型論と自己省察の方法に基づく社会倫理学の端緒

第３節　自己省察の方法に基づく体験・表現・理解の教育方法論

第２章　ディルタイ教育論の課題と現代的展開

第１節　倫理学の類型論における相対化の射程の克服と相補軸に基づく総合化

第２節　社会の教育的課題とその現代的展開

第３章　相補軸に基づく道徳教育の方法原理

第１節　相補軸に基づく総合化と体験・表現・理解の教育方法の統合による可能性

第２節　相補軸に基づく総合化と体験・表現・理解の教育方法の統合の道徳教育への展開

第４章　相補軸に基づく総合化の理論的展開

第１節　「責任」概念の類型と相補軸平面上での位置づけ

第２節　「責任」概念の歴史的発展過程

第３節　能動・受動のスペクトラム的捉えに基づく「責任」概念の相補的捉え

第２部　相補軸に基づく道徳教育の方法原理の実践的展開

第５章　人格主義的方法に基づく道徳授業の実践例とアプローチ拡張のための発問分析例

第１節　人格主義的方法に基づく道徳授業の理論的背景

第２節　人格主義的方法に基づく道徳授業の実践と評価および発問分析

第６章　現実的人格主義的方法に基づく道徳授業の実践例とアプローチ拡張のための発問分析例

第１節　現実的人格主義的方法に基づく道徳授業の理論的背景

第２節　現実的人格主義的方法に基づく道徳授業の実践と評価および発問分析

第７章　現実主義的方法に基づく道徳授業の実践例とアプローチ拡張のための発問分析例

第１節　現実主義的方法に基づく道徳授業の理論的背景

第２節　現実主義的方法に基づく道徳授業の実践と評価および発問分析

第３節　道徳性成長の評価のための柔軟なコンピテンシー・モデルによる単元化の可能性

終 章　研究のまとめと今後の課題

第１節　研究のまとめと成果

第２節　今後の課題と可能性

資料２　関連既出論文一覧

（１）著書

吉田誠,『基礎からわかる道徳教育　－子どもたちが未来に希望の持てる道徳教育を行うために－』，ＮＳＫ出版，2012 年

吉田誠･木原一彰編著,『道徳科初めての授業づくり―ねらいの８類型による分析と探究―』，大学教育出版，2018 年

（２）論文

吉田誠,「中期ディルタイ思想に基づく道徳教育論　－ディルタイの「善」の定義をもとにして－」,『教育と教育思想』,（16），1996 年，15-23 頁。

吉田誠,「ディルタイの『精神科学』における認識論的・心理学的基礎づけとその現代的意義」,『教育と教育思想』,（17），1997 年，67-74 頁。

吉田誠,「ディルタイの道徳教育論における個人と全体の関係」,『教育学研究収録』,（21），1997 年，165-174 頁。

吉田誠,「ディルタイの道徳教育論　－『職業への教育』との関係に着目して－」,『関東教育学会紀要』,（25），1998 年，11-22 頁。

吉田誠,「特別活動における子どもの体験と人間形成　－『体験・表現・理解』の教育－」,『筑波大学道徳教育研究』,（1），1999 年，31-41 頁。

吉田誠,「中期ディルタイのＪ．Ｓ．ミル批判における歴史的課題　－個性の教育と社会の発展はいかに両立するか－」,『ディルタイ研究』,（11），1999 年，31-41 頁。

吉田誠,「『生きる力』を育てる道徳教育　－ディルタイの歴史認識による道徳教育論の現代的意義－」,『筑波大学道徳教育研究』,(2) 23-33，2001 年

吉田誠,「W．ディルタイ『精神科学における歴史的世界の構成』（1910）における『普遍妥当性』概念　－O．F．ボルノーの解釈を越えて－」,『教育と教育思想』,(18)，1998 年，75-84 頁。

吉田誠,「ディルタイにおける理論－実践関係の再検討 －自己省察概念の中期と後期の連続性に着目して－」,『教育哲学研究』,(85)，2002 年，42-58 頁。

吉田誠,「ディルタイ教育論における『教育関係』の段階的解消―道徳教育における『教える』ことと『学ぶ』こととの統合―」,『教育方法学研究』,30，2005 年，13-24 頁。

吉田誠,「トーマス・リコーナの人格教育と我が国の道徳教育との比較　―道徳教育における『教える』ことと『学ぶ』こととの統合に向けて―」,『道徳と教育』,(326)，2008 年，188-198 頁。

吉田誠・村田裕紀,「リコーナの人格教育に基づく道徳的習慣形成の方法の実践と検証　－道徳の時間と学級活動の連携による親切と感謝の習慣化－」,『道徳と教育』,(329)，2011 年，147-157 頁。

吉田誠・村田裕紀,「道徳の時間と特別活動の連携によるアサーションの習慣形成　－日本型人格教育の開発に向けた道徳的習慣形成の方法の実践と評価－」,『道徳と教育』,(330)，2012 年，84-94 頁。

吉田誠,「道徳的行為の教育から人格成長の共同体構築へ　－日本型人格教育のための理論的考察－」,『道徳と教育』,(331)，2013 年，146-156 頁。

吉田誠・中川裕幸,「多様な予期的意識を持たせる道徳授業の開発　－生態学的道徳教育学に基づく自作資料開発と教材分析および実践と評価－」,『山形大学　教職・教育実践研究』,(9)，2014 年，41-50 頁。

吉田誠,「モラル・アフォーダンスの観点から見た道徳教育　－生態学的道徳教育学の可能性－」,『道徳と教育』,(332)，2014 年，87-98 頁。

吉田誠,「道徳の時間における『語り』の子ども中心主義的転回－人格成長の共同体構築に向けた当事者研究の観点からの考察－」,『山形大学教職・教育実践研究』,(10)，2015 年，1-8 頁。

吉田誠,「モラル・アフォーダンス獲得の道徳授業の提案（１）－心理主義的授業と認知主義的授業の課題克服を目指した授業の構想－」,『筑波大学 道徳教育研究』,(16)，2015

年，25-35 頁。
吉田誠,「問題解決的な学習としての当事者研究的道徳授業の可能性と課題」,『山形大学 教職・教育実践研究』,（11），2016 年，69-78 頁。
吉田誠・中川裕幸,「モラル・アフォーダンス獲得の道徳授業の提案（２）－多様で適切な予期的意識を持たせる実践と M－GTA を用いた分析－」,『筑波大学 道徳教育研究』,（17），2016 年，77-86 頁。
吉田誠,「成長志向型教育的予防のためのいじめ定義と目指す学級―当事者研究的道徳授業の観点に基づく提案―」,『倫理道徳教育研究』特別号，2016 年，30-43 頁。
吉田誠,「道徳教育方法論における信念対立の克服に向けて―理想主義と現実主義，行為主義と人格主義の二軸に基づく類型化―」,『山形大学　教職・教育実践研究』,（12），2017 年，29-36 頁。
吉田誠,「道徳科におけるコンピテンシー・ベースの授業づくり―知識構成型ジグソー法を用いた『二通の手紙』の授業の提案―」,『山形大学　教職・教育実践研究』,（12），2017 年，11-20 頁。
吉田誠・逸見裕輔,「資質・能力を意識したカリキュラム・マネジメントに基づく道徳科の評価―コンピテンシー・モデルを用いた複数授業構成とエピソード評価―」,『倫理道徳教育研究』，創刊号，2017 年，22-36 頁。
吉田誠,「『責任』概念の歴史的発展の視点に基づく類型化－能動性と受動性のスペクトラムによる相補的な捉え－」,『倫理道徳教育研究』,（2），2019 年，1-14 頁。
吉田誠・逸見裕輔,「学級目標の達成を目指した学級活動と道徳科の単元構成－コンピテンシーの『垂直的成長』の観点に基づくエピソード評価－」,『山形大学　教職・教育実践研究』,（14），2019 年，1-10 頁。